

第1セッション

『学習指導の方法をめぐって』

放送という、基本的に単一の方向性しか持たないメディアを用いる遠隔教育に対しては、教師が学習者の達成状況を把握し、それによって教授方法に改良を加え、さらに積極的に学習者を励ますといった機能に欠けるという指摘がしばしばなされる。そういった一種の“フィードバック・システム”を何らかの形で放送教育に導入できないだろうか……これが第1セッションでの基本的な問題関心である。1年間のモニター調査に基づき、放送教育開発センター番組研究班（寺脇、若松、柴山、赤堀、浅野）の研究結果の発表をもとに、放送大学の矢部教授、深谷教授、太田客員教授、そしてテレビ朝日の大谷ディレクターを交えて議論を進める。司会は放送教育開発センターの田中教授である。



パネラー	寺 脇 信 夫	(放送教育開発センター教授)
〃	若 松 茂	(放送教育開発センター教授)
〃	柴 山 盛 生	(放送教育開発センター助教授)
〃	赤 堀 正 宜	(放送教育開発センター助教授)
〃	浅 野 孝 夫	(放送教育開発センター助教授)
〃	深 谷 昌 志	(放送大学教授)
〃	太 田 次 郎	(お茶の水女子大学教授)
〃	大 谷 敏 之	(テレビ朝日映像株式会社)
〃	矢 部 章 彦	(放送大学教授)
司会	田 中 正 吾	(放送教育開発センター教授)

○司会（田中放送教育開発センター教授）

それでは、ただいまから第1セッションに移らせていただきたいと思います。この放送教育開発センターには7本ないし8本のいろいろな研究プロジェクトがございますが、この第1セッションはその中の一つ、番組改善研究というふうに呼ばれている班の発表を中心に進めたいと存じます。これは数年前から寺脇教授が代表となりましてずっと研究を続けてきていただいております。現在、まだ完成しておりませんが、ある意味では中間的な経過報告ということでございますが、一応のまとまりができましたので、寺脇先生に、いままでの経過と、どういうことをやったかということについてまずお話をいただき、そしていろいろの先生にご登壇いただきますけれども、後半になりましてフロアの方々もご参加をいただきたいと思いますと思っています。

それではまず最初に、寺脇教授から発表をお願いします。

○寺脇（放送教育開発センター教授）

おはようございます。ただいまご紹介いただきました寺脇でございます。これから、後半に行います全体討議の素材として、現在私どもの研究班が進めております研究の一端をご披露しようと思っています。

〔Ⅰ〕 『番組制作改善研究』に関する研究班の発表

発表は、私と、私の隣におります若松教授、その隣におります柴山助教授の3人でいたします。発表の中でいろいろ資料のディスプレイをいたしますが、そちらの陰に隠れておりますけれども、赤堀・浅野両助教授がディスプレイを手伝ってくれることになっております。

まず、発表に先立ちまして二つばかりお断わりをしておきたいと思えます。一つは、この研究は本来番組の制作改善に関する調査研究でございまして、実は学習指導の方法を開発するための研究ではないんでございます。いわば、受講生の番組を見ての反応を速やかに番組制作の方にフィードバックする。このことは、昨年もしました同種の研究の結果からも、主任講師の方々から強く要望が出ておった事でございまして、そういう事を今年はやってみました。実は今回は、1回1回の理解度がどの程度であるかを速やかに集めるということをやったわけでございまして、たまたまその受講生の反応をとるところが学習指導に関係の深い形をとった。そういうわけで、このセッションの表題にございますように、「学習指導の方法をめぐって」ということこの材料として十分役に立つんじゃないか、発表したらどうかということで、お引き受けをいたしました。そういうわけでございますから、今日ご披露いたしますアンケート調査の方法が即学習指導というわけではございませんので、その点、誤解のないようにしていただきたいと思う事が第1点でございます。

それからもう一つ、この研究は実は年度末まで続いております研究でございまして、今日発表に使いますいろんな資料は、つい先だっの12月の6日ごろに全体の集計を終わったばかりでございまして。手元に集まりましたデータは、まだほかほかと湯気が立っておる状態でございまして、われわれ十分検討が出来ていないという段階での発表だということをご理解いただきたいと思います。

(A) 「研究計画」について

(1) 研究の主旨、内容、対象番組、研究組織

それでは、今年の調査研究の主旨とか内容、対象番組、研究組織等について最初にご説明したいと思います。もともとこの研究は昨年行ったものの継続と考えていただいていたいいんでありまして、少しオーバーヘッドを使って説明させていただきます。

[O.H.P映写]

「大学放送教育番組の制作改善に関する調査研究」これが正式の表題でございます。昨年度は二つの観点からアプローチして研究いたしました。一つは、5種類の実験番組につきまして、教官の方2名、ディレクターの方2名、大学生あるいは大学院生5名、それぞれその科目の専門家の方々に15本の番組を全部視聴していただきまして、それを分析し評価をしていただきました。それを番組制作にフィードバックしようということでございます。

それからもう一つは、主任講師の方及びその番組の制作を担当しましたディレクターに対してインタビューを行いまして、番組の制作に関するいろんな考え方等も徹底的に聞き出すということをいたしました。これらの結果につきましてはすでに昨年、『MME研究ノート』の4号と5号と9号にそれぞれ詳しくご報告してございますので、ご覧いただけたかと思いますが、まだご覧になっていない方は後ほど是非ご覧ください。(表Ⅰ-1)

表 I - 1 研究計画

昭和58年度（昨年度）

**大学放送教育番組の改善に
関する調査研究**

(1) 5つの実験番組の視聴・分析・評価

教官2名、ディレクター2名、大学生、大学院生5名
による。

(2) 主任講師及び担当ディレクターへのインタビュー

昭和59年度（本年度）

**大学放送教育番組の製作改善に
関する調査研究**

(1) 主任講師及び担当ディレクターへのインタビュー

本年度は、放送期間の前後に、2回行う。

やりかたは、第1回目は昨年と同じ。第2回目は、放送終了後アンケート調査の結果をふまえて行う。

(2) 2つの実験番組の視聴・分析・評価

一般受講生の中から50人ずつを、特別モニターとして選んで行う。（アンケート調査による）

(3) 一般受講生全員に最終テストを行い、その理解度を調べる。そして、特別モニターと他の一般受講生との違いをみる。

(4) 最終的な調査結果を踏まえ、第2回目の主任講師並びに担当ディレクターへのインタビューを行う。

本年度の調査研究はその継続でございますが、少しやり方を変えてみました。インタビューを行うことは同様でございますが、今年は放送の前に1回インタビューしておきまして、我々の調査が全部終わった段階で、その調査結果を踏まえて2回目のインタビューをするというふうに改めました。

それから、「番組の視聴・分析・評価」でございますが、去年は専門家の方々9名に番組を見ていただいたんですけども、今年は放送大学の実態に即しまして、一般の受講生200人の中から50人ずつを選びまして特別モニターになっていただきました。そして、毎週放送のたびごとに、questionnaireを送り届けまして回答を求めるという形で、分析・評価していただくと考えました。さらに、放送の最後に最終試験もやりたいと、こんなことで進めてまいったわけでございます。

(2) 研究のフローについて

a. 第1回の主任講師及び担当ディレクターへのインタビュー

研究のフローをついでに申し上げますと、先ほど申しましたように、放送が始まりますまでに第1回目の主任講師及び担当ディレクターの方へのインタビューを行う。そうしまして、アンケート調査の準備に取りかかりました。(表I-2)

b. アンケート調査の準備

表I-2 研究のフロー

1. 第1回目主任講師及び担当ディレクターへのインタビュー
2. アンケート調査の準備
 - ・ 特別モニターの選定
 - ・ Questionnaire及び正誤表の作成
 - ・ 回答用ハガキの準備
3. アンケート調査の開始
 - ・ 15週にわたる定期的送受信（8月20日から開始）
4. 回答集計と結果のフィードバック
 - ・ コンピューターによる業務の効率化と省力化を図る。
5. 最終試験の実施
 - ・ 11月15日～12月1日の間に行う。
6. 第2回目主任講師及び担当ディレクターへのインタビュー
 - ・ アンケート調査の結果や最終試験の結果を踏まえて行う。
7. 当研究プロジェクトに対する特別モニターの感想文依頼
8. 調査結果を検討する研究会の開催

- ・特別モニターの選定
- ・Questionnaire及び正答・誤答表の作成
- ・回答用ハガキの準備

準備といたしまして、50人ずつの特別モニターを選定し、そして主任の講師の方に15回のQuestionnaireと受講生にフィードバックいたします正答・誤答表の作成をお願いし、回答用のハガキも準備致しました。

c. アンケート調査の開始

- ・15週にわたっての定期的送受信

そうしましていよいよアンケート調査の開始でございますが、8月の23日が『青少年文化』の第一回目の放送でございます、Questionnaireを8月20日の月曜日から送り始めました。そうしまして、後ほど詳しくご説明いたしますが、15週にわたって定期的な送受信を行いました。

d. 回答の集計と結果のフィードバック

- ・コンピューターによる業務の効率化と省力化

毎週回答が送り返されてまいります。それを集計いたしまして、その結果をすべてまた受講生に送り返すことをいたしました。大変繁雑な業務でございましたが、我々研究者は非常に数が限られておりまして、小人数でやった

ものですから、出来るだけ効率化と省力化を図りたいということでコンピューターを導入いたしました。コンピューターで集計して、フィードバックを行ったわけであります。

ここの所、「2. アンケート調査の準備」と「4. 回答の集計と結果のフィードバック」に下線が引いてありますのは、この部分が、きょうの問題にあります学習指導の方法に多少関係があるものですから、このあたりを後ほど詳しく中間報告したいと思っております。

e. 最終試験の実施

・ 11月15日～12月1日の間

最終試験も実はもう実施いたしまして、きょう後ほどご報告致します。

f. 第2回の主任講師及び担当ディレクターの インタビュー

・ アンケート調査の結果や最終試験の結果を
踏まえて

g. 当研究プロジェクトに対する特別モニター の感想文依頼

そうした結果を踏まえて、この後2回目のインタビューを行い、また、

このプロジェクトに参加してくださった特別モニターの方々に、感想文をいまお願いしております。

h. 調査結果を検討する研究会の開催

以上のデータをある程度整理した上で、最後に、来年そういう資料に基づいて研究会を実施していきたいと、こんなふうな考えで進めていこうと思っています。

(3) インタビューについて

そこで最初のインタビューでございますが、初めに担当表をご覧にいれておきましょう。(表Ⅰ-3)

「係」となっているのがそれぞれの担当でございますが、左側に「受ける人」と書きました先生方のところにその係がお邪魔したわけでございます。深谷先生には私がいたしました。門脇先生にも私がインタビューいたしました。それから、その番組の担当でございました飯島ディレクター、それから、きょう後ほどご登壇いただきますが、大谷プロデューサーには赤堀助教授がインタビューいたしました。太田先生には若松教授、担当の渡部ディレクターには浅野助教授がそれぞれインタビューいたしました。

この第1回目のインタビューの記事は、先ほどお手元にお配りました『ME研究ノート』13号に全部載っておりますので、後ほどご覧頂きたいと思います。

表Ⅰ－３ 第１回のインタビューの日程と担当者

受ける人	係	日時	場所
深谷先生	寺脇	8月14日(火) 前11:00～ 13:00	センター 2階会議室
門脇先生	同上	8月20日(月) 前10:30～ 12:30	放送大学 東京連絡所
飯島ディレクター 大谷プロデューサー	赤堀	9月28日(金) 後1:00～ 3:00	テレビ朝日 会議室
太田先生	若松	8月17日(金) 後2:00～ 4:00	お茶の水 女子大学
渡部ディレクター	浅野	9月12日(水) 前10:00～ 12:00	放送大学 東京連絡所

(4) アンケート調査の方法について

a. 特別モニターの選定について

次はアンケート調査の準備の段階のお話をちょっとしておきたいんですが、『MME研究ノート』の100ページをお開きいただきたいと思います。

その前に、申し上げるのを忘れましたが、今度の実験の対象番組といたしまして、ここにいらっしゃいます深谷先生が担当なさいました『青少年文化』と、太田先生がご担当になりました『人間の生物学』、この2本の番組を取り上げました。

特別モニターの候補としまして最初それぞれ70名ずつ選びまして、その70名の方に特別モニターを引き受けていただけるかどうかを聞いたわけでございます。その結果、『青少年文化』につきましては48名の方が特別モニターを希望するというご返事をくださいました。それから、『人間の生物学』の方は55名の方がお引き受けくださいました。

『特別モニター』

(59.8.15)

「青少年文化」

東京 (100) 24名

主婦 6名
公務員 10名

	<div> <div>会社員・・・・・・・・・・ 6名</div> <div>自由業・・・・・・・・・・ 2名</div> </div>	
千葉 (200)	・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13名	
	<div> <div>主婦・・・・・・・・・・ 5名</div> <div>公務員・・・・・・・・・・ 0名</div> <div>会社員・・・・・・・・・・ 4名</div> <div>自由業・・・・・・・・・・ 4名</div> </div>	
埼玉 (300)	・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4名	
	<div> <div>主婦・・・・・・・・・・ 1名</div> <div>公務員・・・・・・・・・・ 1名</div> <div>会社員・・・・・・・・・・ 2名</div> </div>	
神奈川 (300)	・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7名	
	<div> <div>主婦・・・・・・・・・・ 2名</div> <div>公務員・・・・・・・・・・ 3名</div> <div>会社員・・・・・・・・・・ 2名</div> </div>	
計	・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48名	

『特別モニター』 (59.8.15)

「人間の生物学」

東京 (100) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29名

主婦・・・・・・・・・・ 7名
公務員・・・・・・・・・・ 9名

	<div> <div>会社員・・・・・・・・・・ 9名</div> <div>自由業・・・・・・・・・・ 4名</div> </div>
千葉 (200)	・・・・・・・・・・ 15名
	<div> <div>主婦・・・・・・・・・・ 7名</div> <div>公務員・・・・・・・・・・ 2名</div> <div>会社員・・・・・・・・・・ 5名</div> <div>自由業・・・・・・・・・・ 1名</div> </div>
埼玉 (300)	・・・・・・・・・・ 7名
	<div> <div>主婦・・・・・・・・・・ 3名</div> <div>公務員・・・・・・・・・・ 2名</div> <div>会社員・・・・・・・・・・ 2名</div> </div>
神奈川 (400)	・・・・・・・・・・ 4名
	<div> <div>主婦・・・・・・・・・・ 2名</div> <div>公務員・・・・・・・・・・ 1名</div> <div>会社員・・・・・・・・・・ 1名</div> </div>
計	・・・・・・・・・・ 55名

その48名と55名の方々について、15回にわたって毎週問題を送り、回答をいただき、またその回答の結果を送り届けるということをやったわけでございます。

b. Questionnaireと正答・誤答表の作成について

ちょうどこの15回分の問題を作ってください時期が、お2人の先生とも今年の実験番組のVTR撮りの一番忙しい時でございまして、大変お忙しい

中を15回分作って頂きまして、ご苦勞をおかけしました。おかげで、放送が始まります8月の15日の時点には、郵送する15回分の材料が全部揃ってありましたから、以後の送受信が大変スムーズにまいりまして、その点、問題を作っていただきました深谷先生、門脇先生、太田先生に感謝しております。

c. 定期的送受信について

その次に、その Questionnaire をどういうふうに送り届けたかということでアンケートの定期的送受信ということをご説明致します。とにかく小人数で3ヶ月以上、15回にわたってやりとりしなきゃいけないものですから、出来るだけ手間を省きたいと言うことで、『青少年文化』につきましては放送が木曜日でございますから、木曜日までにはこの問題が届くようにしたい……。そういうふうに考えますと、どうしても月曜日の午前中にはこの幕張から送り出さなければ間に合わないだろうということで、問題を送るのは月曜日の午前中というふうに決めました。

Questionnaireと回答用のハガキを封筒にいれまして、午前中に送る。そして、その回答の締め切りを次の週の月曜日の午前中というふうに決めたわけでございます。月曜日の午後にその回答の処理をするということに致しました。

なお、郵便事情があまりここは良くございませんので、やむなくこういうふうになったんですが、出来れば、2回目の問題を送ります時に1回目の回答の結果も入れたかったんですけども、それはどうしても間に合いませんので、個人別の回答結果だけは3回目から入れるというふうに致しました。少しややこしいので、実例でご説明したいと思います。(表I-4)

表 I - 4 アンケート用紙・回答用ハガキ等の定期的送受信

(例) 『青少年文化』の場合

[送信]	[受信]
<div>8/20 (月)</div> <div>第1回放送に関する Questionnaire 回答用ハガキ</div>	
<hr/> <div>8/23 (木) <第1回放送> 回答 (1)</div> <hr/>	
<div>8/27 (月) (午前中)</div> <div>第2回放送に関する Questionnaire 回答用ハガキ 第1回の正誤表</div>	<div>(午後)</div> <div>第1回回答の集計 個人別回答結果を アウトプット</div>
<hr/> <div>8/30 (木) <第2回放送> 回答 (2)</div> <hr/>	
<div>9/3 (月)</div> <div>第3回放送に関する Questionnaire 回答用ハガキ 第2回の正誤表 個人別回答結果</div>	<div>第2回回答の集計 個人別回答結果を アウトプット</div>

『青少年文化』の場合についてご説明いたしますと、第1回目の放送が8月23日の木曜日でございますので、22日の夜までには1回目の問題を届けなきゃならないということで、月曜日に第1回目に関する Questionnaire と回答用ハガキを送ることに致しました。そうしまして、その回答が次の27日の月曜日の午前中に集まりますので、午後にすぐ集計いたしまして、アウトプットを出すというふうに致しました。そして、27日の月曜日に2回目の Questionnaire と回答用ハガキと、そして、第1回目の Questionnaireの正答・誤答表を入れて、30日の木曜日の前日までに届くように送ったわけでございます。そして、3回目の Questionnaire を送ります時に、1回目の個人別の回答結果を入れて送り返す、こういうふうに致しまして、これの15回の繰り返しということでアンケート調査を実施してまいったわけでございます。

今お話ししました様に、そういう形で15週定期的な送受信を繰り返したわけございまして、回答集計の方法等につきましては後ほど、この最終試験の回答の集計も含めて、柴山助教授から発表してもらう事にしたいと思います。

(5) 最終試験の実施について

(計画)

- a. 対象……受講生(特別モニターを含む)
- b. 問題……各番組ごと5問ずつ出題する
- c. 締切……12月1日(土)

次に、簡単に、最終試験の実施についてお話ししておきたいと思います。
実は当初、最終試験の実施は考えておりませんでしたけれども、やってまいります中で、深谷先生、太田先生の、「放送の終わりに一度最終試験をやってみたらどうだ、問題を作るよ」と言うお言葉をいただきまして、「それじゃやってみよう」ということになりました。期間は11月の15日から12月1日までの間、方法は郵送法ということになりました。アンケート調査の方は1回1問という事でやったんですが、最終試験はそれぞれ5問という事に致しまして、そして五肢選択で致しました。

締め切りは12月の1日という事で先日締め切りまして、6日に集計を完了致しましたので、後ほどその結果の一端をご披露しようと思っております。

ここで、その中の1問だけご披露したいと思います。(表I-5)

表I-5 問題例

(お願い)

次の問に答えてください。回答は、回答用ハガキの枠内に番号を書き入れて占めきり期日までに返送してください。

[第1問]

「ヒトの脳の特徴」について、次の中の正しいものを一つ選びなさい。

1. ヒトの脳は、他の動物と比べて、特にすぐれている点はない。

2. ヒトの脳は、140億個のニューロンのみから構成されている。
3. ヒトの脳は、コンピューターとは、情報の伝わり方が、全く異なっている。
4. ヒトの脳は、大脳の前頭葉が発達し、各種の中枢の分業体制が確立している。
5. ヒトの脳のみが、パターン認識をすることができる。

B5版に1問ずつ入れまして、五肢選択に致しました。つまり、この問題を5問送りました。回答用ハガキといたしましては、こういう形で回答を求めたわけでございます。(表I-6)

表 I - 6 回答用ハガキ

(回答用ハガキ)	
番組	人間の生物学
受講生番号	
氏名	

第1問. . . (答)

第2問. . . (答)

第3問. . . (答)

第4問. . . (答)

第5問. . . (答)

以上で最終試験の実施についてご説明したわけですが、それではここで、次にその回答の集計と結果のフィードバックの事につきまして、柴山助教授から説明していただこうと思います。じゃ、柴山さんよろしく。

(6) 回答集計の方法について

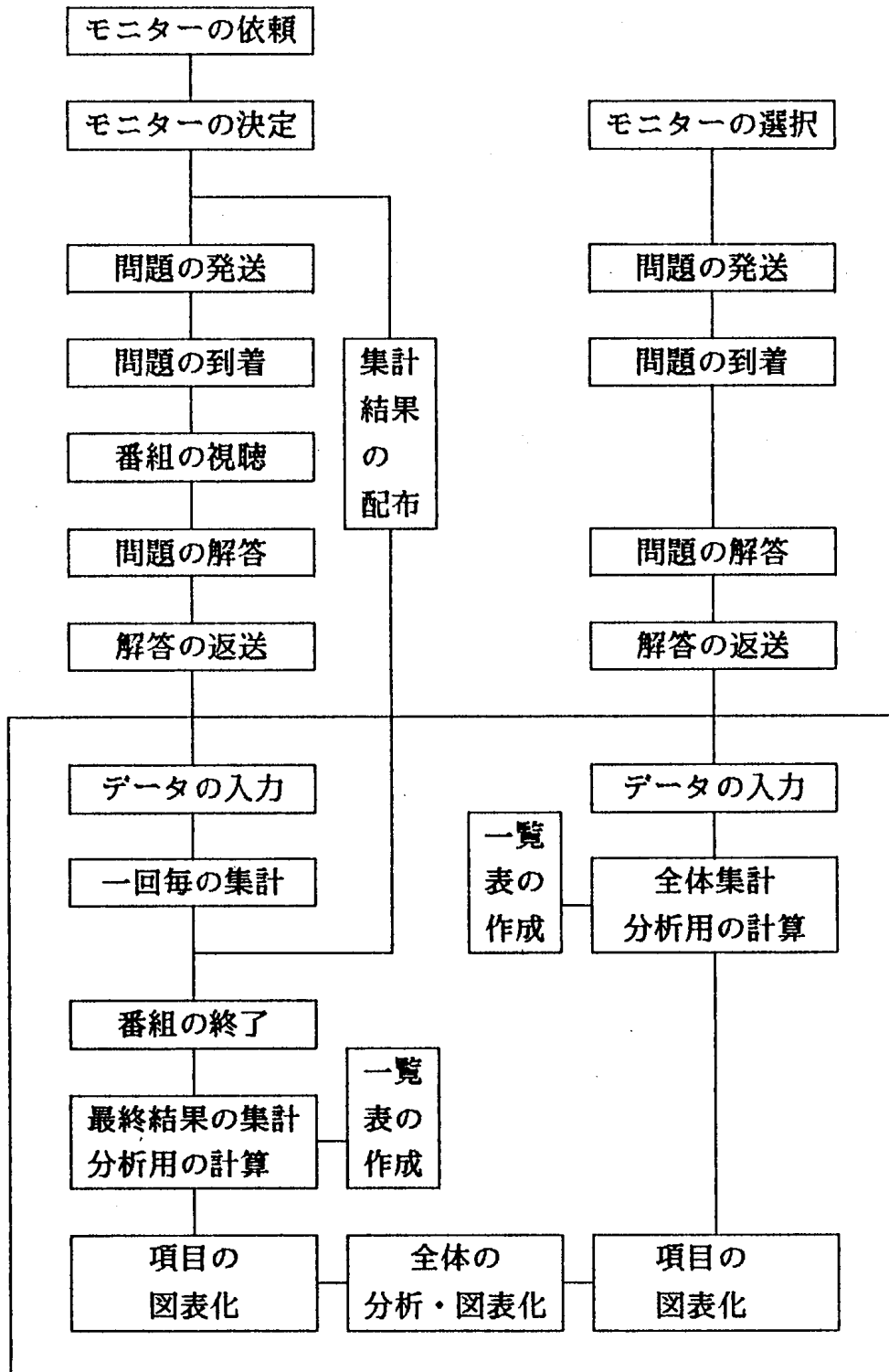
○柴山（放送教育開発センター助教授）

それでは、今回のアンケートにおきまして、どのようなデータ処理を行ったかということを説明させていただきます。（表 I - 7）

表 I - 7 アンケートのデータ処理手順

(特別モニター用)

(共通アンケート)



左側にありますのは、特別モニターに対して行った15回の回答分の処理手順でございます。それから、右側にありますのが、最終試験を行った特別モニターと、一般のモニターの方々に行ったアンケートの処理手順でございます。

どちらも最初にモニターを選びましてからそれぞれ問題を発送し、それからモニターの方々に到着し、その番組を見てから回答を書き添えて、返送されてくるわけです。共通アンケートの方、つまり最終試験の方でも同じようなプロセスが続きますけれども、結果の処理はパソコンを用いて行いました。まずデータをキーボードで入力致しまして、1回毎にプリントアウトする。そして、15回の放送が終わりましたら、それまでの結果表、それから、受講生がどういう状況で回答してきたかという一覧表であるとか後は、その属性などによって多少分析のような計算を行います。最後にそれらを図表化致しまして、見やすくする作業を行っております。

それから、最終試験の方も全く同じでございまして、最終的にグラフに致しましたら、特別モニターの方の15回の状況と、最終試験の結果はどうであったかという簡単な分析もこれから行いたいと思いますけれども、今日のところはちょっとご披露出来ません。

こういったデータ処理をどのように行ったかという興味もおありかと思っておりますので、簡単にご説明申し上げます。(表I-8)

表I-8 パソコン処理の概要

1. ハードウェア

IBM5550

2. ソフトウェア

(1) 文書作成. . . ワードプロ

(2) OS. . . MS-DOS

(3) ユーザープログラム

ア BASIC

イ 顧客管理 (P.C.A.)

ウ Multitool chart (Microsoft corp).....グラフ表示

3. プログラムの機能

(1) 特別モニター用処理

ア 属性ファイルの作成

イ 受講生ファイルへの変換

ウ 回答データの入力

エ 各回毎の集計結果のプリント (返送用)

オ 最終結果のプリント (返送用)

カ 分析計算

キ グラフ表示

(2) 共通アンケート用処理

上記のエを除いたもの

4. 諸条件

(1) 操作性

ア 初心者が扱える。.....対話形式

イ 出力用紙の制約.....B5縦書

(2) 処理サイクル

ア 週1回(2番組)で15週

イ 最終結果(1回)

(3) 追加処理

ア 共通アンケート

イ 途中経過の表示

ウ 分析計算(グラフ)

コンピュータはIBMの機械で、16ビットのものです。

これでどんな事をやったかといいますと、普通の文書作成も行いましたし、実際にパソコンとしての機能を用いましたけれども、プログラムのほとんどはBASICで作りまして、属性の条件を入れる所であるとか、最後にグラフを作成するようなどときには一部市販のソフトを使用しております。プログラムの機能と致しましては、データを入力する所やプリントアウトするところから分析計算までは全部手で組んでおります。

それから、作る上でちょっと注意致しました点は、研究会のスタッフにほとんどパソコンの知識がない方が多かったわけで、非常に簡単に操作出来るというような作り方と、それから、出力用紙の制限——一般の電算機は連続用紙を使いますけれども、印刷の事を考えまして、B5版の縦書という制限があります——を考慮しなければならなかったことです。

処理は、毎週2つの番組をやりますけれども、それを15週続ける事、最終試験を1回やるという事。それから、先ほどお話にもありましたように、途中からいろいろな条件が付きまして、実際に最終試験をやってみるとか、15回の内の10回あたりで途中経過を出してくれないとか、それから、

最後に分析計算をもう少し増やしてくれとか、あるいはグラフをもう少し表示してくれないかという相談がありましたが、応用のきくような作り方を最初からしていたので、幸いに間に合ったのだと思います。

それでは、こういった状況でパソコン操作をしたかという簡単なデモのビデオがありますので、そちらの方をご覧になっていただきたいと思います。

[ビデオ映写]

これは『青少年文化』の15回目の集計を行っている所ですが、15回目になりますと先生方はもう随分慣れておりまして、特に私が付いていたわけではありません。これはデモですけれども、恐らく1回目の状況に一番近いと思います。寺脇先生がキーボードを操作しておられまして、若松先生が回答のハガキを呼んでおられます。ここでは、個人のデータですので、名前を表示出来ないのが残念ですけれども、1人ひとり、例えば山田さん何番であるとか、佐藤さん何番であるとかという作業が、実際に行われました。

表 I-9 データ処理画面例

番組制作改善研究班

== 処理選択メニュー ==
1. 受講状況の登録/更新
2. 集計結果のプリント
3. 最終処理
4. 終了

処理番号は ? █

1[ISF] 2[RUN] 3[LOAD] 4[SAVE] 5[OUT] 6[LPT1] 7[TRON] 8[TROFF] 9[KEY]

番組制作改善研究班

受講した番組はどちらですか ?
(1. 青少年文化 2. 人間の生物学)

番組の番号で (1-2) ? 1

何回目の放送ですか (1-15) ? 15

青少年文化の 15 回目の放送ですね

正解はどれですか (1-5) ? 2

次に進んでいいですか (y/n) ? ■

1[LIST] 2[RUN] 3[LOAD] 4[SAVE] 5[CONT] 6.[LPT] 7[TRON] 8[TROFF] 9[KEY]

番組制作改善研究班

***** 受講状況の登録/更新 *****

番組名 : 青少年文化

回 : 15回目

受講生番号 : 4134

氏名 : ■■■■■■

回答 : ■

1[LIST] 2[RUN] 3[LOAD] 4[SAVE] 5[CONT] 6.[LPT] 7[TRON] 8[TROFF] 9[KEY]

番組制作改善研究班

フ° リントする番組はどれですか ?
(1. 青少年文化 2. 人間の生物学)

番組の番号で (1-2) ? 1

何回目の放送ですか (1-15) ? 15

青少年文化の 15 回目の放送ですね

フ° リンターの用意をしてください !

次に進んでいいですか (y/n) ? ■

1[LIST] 2[RUN] 3[LOAD] 4[SAVE] 5[CONT] 6["LPT1] 7[TRON] 8[TROFF] 9[KEY-]

『青少年文化』の場合48名、『人間の生物学』の方が55名の特別モニターがいらっしゃいますけれども、大体その8割ぐらいの方が常に出されておりますので、このキーボードの入力と言うのは大体5分繰り返し2回やったとしても10分程度で終わるようなものです。

このマイナスの符合は回答がなかったという記号で、後、回答があった方は1から5までの数字が入っております。

データの入力が終わりましたが、毎回ごとに集計するものがありますから、それをプリントアウトする状況が次の場面です。

ここでの計算は、主に、回答者は何人いたとか、どれぐらいの正答率であったかという計算ですので、それほど難しい事はやっておりません。これが

ら出す表というのは、特別モニターの方々に返す分の個人別表が出ております。それから、もちろんその後に、こちらのスタッフが手持ち用にするリストであるとか、さまざまなものが実際はあります。（表I-10）

『青少年文化』の15回目の問題が多少難しかったようで、あまり成績が良くなかったという状況がこのシーンでございます。32名の方が回答されましたけれども、正解が3名しかいなかった。正答率9.4%、このシリーズの中では一番悪かった結果が、たまたまシーンに出ております。

このようにして各回ごとにデータ処理を行ったわけですが、15回終わりました後で、見やすくするために多少グラフを作りました。ほんの一部ですが、『MME研究ノート』9号の114ページ、115ページに書いておりますのでご覧になっていただきたいと思います。

次のシーンは『人間の生物学』におきましてやはり同じような人数の変化を示すものですが、今度は折れ線グラフで表示したらどうなるかといった事をしております。全モニターに対する回答者の数、全モニターに対する正答者の数、それから、回答者に対して正解答がどれくらいあったかというような率を表示しております。

これで、コンピューターの一連の操作の概要の説明を終わらせていただきます。

○寺脇

以上でわれわれが研究を進めてまいりました過程でどういう事を行ったかという事をご説明したわけでございます。そこで次に、教材として使わせていただきました二つの番組について、一緒にみていきたいと存じます。お2人の先生方への第1回目のインタビュー結果は『MME研究ノート』にも載せてございますが、それを要約して先生方にお話を伺って、具体的に番組

表I-10 集計結果のプリントアウト

アンケートの集計結果
 番組名 (回) : 青少年文化 (第15回目)
 受講生番号 : 4141
 氏名 : ■ ■ ■ ■ ■
 正解 : 2
 あな た の 答 : 5
 回答者数 : 32
 正解者数 : 3
 正答率 (%) : 9.4

アンケートの集計結果
 番組名 (回) : 青少年文化 (第15回目)
 受講生番号 : 4142
 氏名 : ■ ■ ■ ■ ■
 正解 : 2
 あな た の 答 : 3
 回答者数 : 32
 正解者数 : 3
 正答率 (%) : 9.4

アンケートの集計結果
 番組名 (回) : 青少年文化 (第15回目)
 受講生番号 : 4146
 氏名 : ■ ■ ■ ■ ■
 正解 : 2
 あな た の 答 : 4
 回答者数 : 32
 正解者数 : 3
 正答率 (%) : 9.4

アンケートの集計結果
 番組名 (回) : 青少年文化 (第15回目)
 受講生番号 : 4147
 氏名 : ■ ■ ■ ■ ■
 正解 : 2
 あな た の 答 : 3
 回答者数 : 32
 正解者数 : 3
 正答率 (%) : 9.4

の一部分を皆さんに見ていただこうと思います。深谷先生から、ひとつよろしくお願い致します。

(B) インタビューの要約と番組の部分視聴

＊ 『青少年文化』について

- a. できるだけ映像で見せよう
- b. [テレビ番組+テキスト] でワンセット
という考え方
- c. 映像資料センターの準備を急げ

○深谷（放送大学教授）

僕は専門が教育学でございまして、たまたま去年『学校教育』で、これと同じような形でテレビを使った教材を作らせていただいたわけです。今年は、これからご覧いただきますような『青少年文化』でございまして。

いま準備しておりますのが、来年のラジオを使った『児童観』というふう
に、教育学の流れの中で三つか四つぐらいの教材をこれからずっと作って
いくわけですが、今年やってみて非常に戸惑いましたのが、『学校教育』
の場合にはある程度先生をイメージに置いて、多分先生方にこれは必要
だろうというような、知識の固まりをきちっと伝達するような感じの教材
作りを考えたわけなんです。

今準備しております『児童観』と言うのは、これはラジオでございまして
から、かなり固まった、子供をどう理解していったらいいかと言うのを相当深

く掘り下げていこうと思ったわけです。しかし、青少年文化、例えば子供の文化、若者の文化といいますと、これは深く掘り下げていくともう限りなく深くなってしまうし、といて、やさしく考えていくと、文化論でございますから、焦点がぼやけてしまう。

実をいうと、今度の『青少年文化』というのは、筑波大学の門脇さんという青年文化の専門家がおりましたので、彼と2人で、前半が「子供文化」、後半が「若者文化」というふうに全体を二つに分けておいて、今日は実は印刷教材をお持ちしていないんですが、主として印刷教材の中では客観的なデータを基にして、「文化」をどう捕えていったらいいのかという理論的なものを出していく。映像の方は正直いうと、出来るならば楽しい映像を作ってしまうんじゃないかと思って作りました。

後でお暇な時に——お暇といっちゃわるいかな——（笑声）『MME研究ノート』をご覧いただくと、ディレクターの方からも、それから後から大谷さんからもコメントがあると思うんですが、そういうような批評が出ておりますけれども、多分、放送大学の使う放送メディアの中では相当くだけた方の教材を作ったことになったんだろうと思うんです。

ということは、あまり今の子供とか若者の事を知らない方をイメージに置いて、とにかく六本木にカメラを持ち込んで子供の姿を写してみよう、若者の姿を写してみよう、ディズニーランドにカメラを持ち込んで、裏方のサイドからディズニーランドを明らかにしてみよう、とかいう形で楽しい物を考えました。

ただ、勿論、民放でもございませんし、大学教育でございますから、おのずと楽しいのには限度がございますけれども、結局、印刷教材で理屈を学んでいただく、放送教材では——実は『学校教育』を去年やってみて思いまし

たが、自分で見てみると、45分というのはすごく長いですね。とてもじゃないけれども、もたないです。その反省から、もうとにかく見ていただこうじゃないか、楽しんで貰おうじゃないか……。ただ、ちょっと今度は楽しみ過ぎまして、この次作る時は、もう少しまじめなのを作ろうと思いますが、やや楽しいもの、と言っても、これも僕の考えている楽しさであって、受講生にとっては、まだまだ苦痛だとおっしゃるかもしれません。多少、学ぶ人達のためのサービスを考えて作ってみました。

ただし放送大学の場合、教育学の授業体系全体の中には、非常に辛口でもって質の高い物から非常に易しくて見やすい物まで、恐らくいろんな教材が出てくるだろうと思うんで、そういうものをワンプロックとして、その中ではやや易しいものを作ってみようと思ったのが『青少年文化』の狙いでございます。

やってみた感じで、今日は、「子供文化」ですから、「おもちゃ」をこれからご覧いただくんですが、おもちゃ一つ取り上げていきましても、おもちゃをどう捕えていくかという難しい話をやってしまうと、普通の方はほとんどついてこれないような専門的な話になってしまうわけですね。それから、「童話」の話は今日は出ませんけれども、「童話」の話も、童話とは何だろうかなんていう話になってしまうと、これはもう完全に童話の各論になってしまう。そこで、文化というのをある程度社会現象として、幅の広い所で捕えようと思ったのが今度の狙いになるわけです。

やってみた感じからしますと、とは言いながら、これからの課題になると思うんですが、われわれ研究者というのは、先生方もそうだと思うんですが、本がどこにあるのかというのはよく知っていますね。あたりまえですけども、われわれは活字メディアについては非常に強いような気がする

んです。ところが、例えば童話なら童話の本がどこにあって、どういう映像があるかという、映像面についての資料の探し方はほとんど分っていないわけですね。

たまたま今度の場合にはテレビ朝日の大谷さんとか飯島さん、実は去年『学校教育』と一緒にやった方とチームが組めましたので、気心も知れておりますし、2年目になりましたから、その方達が少し教育の問題について関心を持たれるようになりまして、こちらからいうと非常に言葉が話し易くなっておりましたけれども、とは言いながら、ディレクターの方達というのは教育問題についてはやはり素人なわけです。これはあたりまえなことですね。そうすると、処理の仕方はわかっているんだけど、あるテーマについては素人さんのディレクターと、こちらは知識は持っているんだが、どこに映像があるかわからない、そういう意味では素人とが重なって『青少年文化』を作らなきゃならないわけですね。

そうした意味では、今度のは僕らはとりあえず放送大学の映像として、取っかかりとしては作りましたけれども、これから後何年かはできればいつもディレクターが決まっていて、両方が相談をしながら、データをファイルしていくというんですかね、こういう映像はこういう所にある、こういう映像はこういう所にいけば見つかるというふうにして、ディレクターと二人三脚のような形で映像作りをしていかないと、質のいい教材が作りにくいなあというのが全体の印象でございます。とりあえず今の段階ではそのくらいですが……。

○司会

それでは、さっそくその番組の一部を見てみたいと思います。

[ビデオ、「おもちゃ」、「六本木」、映写]

○司会

いろいろご意見がおありかと思いますが、それは後半の全体討議のところ
で出していただくことにいたしまして……。

○深谷

一言だけ補足させていただきます。今ご覧いただきましたように、私ども
が門脇さんと一緒に狙いましたのは、とにかく子供とか若者を理解するという
時にわれわれ大人はどうしても批判をしてしまうわけですね。せっかくテレ
ビといういい映像があるので、まず、とにかくそれをわかろうじゃないかい
う事を主眼にして、今度の講義でいったならば、細かい知識とか何かを覚え
てもらうつもりは、こちらには無かったんですね。子供とか若者の生き方み
たいなものを、いいとか悪いとかいう事は別として、理解してみようじゃな
いかという形で作った。ですから、いまのも相当、普通の大学の授業からい
うと型破りなのかもしれませんが、こういうのもあっていいのではない
かと思って作りました。

○司会

それでは、時間の関係もございまして、次に太田先生の『人間の生物学』
について、まず先生のご意見を伺えたらと思いますが。

＊ 『人間の生物学』について

a. 番組制作は、共同作業である事

b. 15回のプロットを始めに用意した事

c. 各回に必要な資料を予めディレクターに示した事

○太田（御茶の水女子大学教授）

私が今回担当致しました『人間の生物学』と言うのは、深谷先生の今の『青少年文化』は専門科目でございますけれども、いわば基本科目、言い換えますと、大学の一般教育にあたる番組でございます。こういった一般教育的な番組を、どの程度の内容で位置付けるかと言うのは大変難しいように思いました。と申しますのは、高校課程、あるいはそれ以前の課程が年々変化しておりますので、どの程度の基礎知識を持った人が大学に入ってくるかということが、どうもよく分らないと言う点がございます。特に放送大学の場合にはそれが非常にはっきりしないと言う事がございましたので、ある程度現在の高等学校で教えている内容でも人間の生物学を理解する上で重要な内容は取り入れようと考えたわけでございます。

これはテレビの番組でございますが、テレビについては出来るだけ映像を使って、特に生物のものでございますから、映像でなければ示されない部分をテレビに使おうと考えました。たまたま今回の番組で、私に付いてくれました方は大変若い、しかも、物理学出身のディレクターだったんでございますが、実に恵まれたと申しますか、大変熱心な人でございまして、いろいろな番組制作に始めから私共と全く共同作業でやるという状態になりました。

もともと私はテレビというのは、内容を決めますのはこちらであっても、大部分のことは共同作業でなければ出来ないと思っております、ディレクターだけではなくカメラマンも、ある場合には技術のディレクターの人達にも気心が通じませんという番組は出来ないものだと、実は経験上考えております。そういう点では今度はディレクターに恵まれまして、大変熱心にやっ

てくれました。

生物でございますと、季節とか、あるいはいろんな問題がございまして、例えば、取材しようと思って現実にはついに撮れなかったということがございました。その為にこの番組の内容が映像的には非常に希薄になるというのでがっかりいたしますと、全く同じようにディレクターががっかりしてくれます。まあ、ディレクターががっかりするのは当たり前かもしれませんが、そういう所で大変気心が合いました。ですから、今度の番組について出来不出来は別と致しまして、われわれが共同してチームを作ったという感じでは、ある意味では私は満足しております。

その場合、その協力がうまくいきましたのは、実はこの番組は前に実験番組で一度出しましたので、それを改正致しますために、予め制作の開始前に15回分のプロットを考える事ができまして、私共は絵コンテと呼んでおりますけれども、この番組についてはこれこれの絵をこういう順序で並べたいというコンテを、全部、制作開始前にディレクターに渡しておく事ができました。ディレクターがそれを見まして、実際に自分が取材をしてきて、今日お見せするのなんかにもそれが含まれていると思いますけれども、例えば「本能と学習」と言うような番組をやるといたしますと、同一の鳥の警戒音と給餌音が、片方が学習で片方が本能であるという映画があるんだが、この映画を使わないかというような具合で、むしろディレクターの方が積極的に私共に素材の提供を申し出てくれました。

そういう点で、やはり番組制作の場合にはできるだけ早くこちらの意図を知らせ、プロットを作って、両方で共同作業を進めていくということが大切なのではないかと私は考えております。

ただ、そうは申しまして、あまり口はばったい事は申せません。という

のも、テレビというのは、何十回やりましてもこれほど難しいものは無いというのが私の痛感している所でございます、やはり自分の満足するような作品はなかなか出来ないものだと思います。

それでは番組のほうを……。

[ビデオ「人類の誕生まで」、「本能と学習」映写]

○司会

面白いものをどうもありがとうございました。

○太田

打合せと違いまして、人間の顔は出さないという約束だったんで、大変お見苦しくて申しわけございません。(笑声)ただ、最後にお見せしました、給餌音と警戒音の区別が出来るのは、一方は本能でもう一方は学習によるといった事がよく分るフィルムというのは、実はディレクター自身が探して参りまして、このフィルムがあるんだけど、これを使ったらよくわかるんじゃないかと教えてくれたんです。大変私ども有難く思ったわけでございます、非常に面白いと思いました。

○司会

そうですね。私も初めて見ました。とっても面白いと思いますね。少し時間が押しつまっておりますので、「調査結果の発表」は、できるだけいっまんて早目をお願いします。

(C) 調査結果の発表

(1) アンケート調査の結果

＊ 『青少年文化』について

- a. 各回の回答者率・回収率
- b. 正答率の推移
- c. 全体を通じての回答者率・回収率
- d. 無回答者数・中途脱落者数
- e. 連休前後の回答者率の減少状況
- f. 催促の手紙を出した状況

○寺脇

大分時間が延びてしまいまして、最初の研究の流れを説明するのに時間を
とって、失礼致しました。

それじゃあ、今度は調査の結果をご披露したいと思いますが、最初に申し
ましたように、まだ十分検討は済んでおりませんので、あまり詳しい事は申
し上げられないのですけれども、数字の事実だけを一つご覧いただきたいと
思います。

まず、『青少年文化』を私が報告致します。(表Ⅰ－１１)

[O. H. P. 映写]

表 I - 1 1 青少年文化の回答状況の推移

回	回答者数	正答者数	回答者率	正答者率	正答率
1	39人	33人	81.3%	68.8%	84.6%
2	43人	43人	89.6%	89.6%	100.0%
3	41人	39人	85.4%	81.3%	95.1%
4	39人	31人	81.3%	64.6%	79.5%
5	41人	39人	85.4%	81.3%	95.1%
6	37人	29人	77.1%	60.4%	78.4%
7	37人	32人	77.1%	66.7%	86.5%
8	30人	29人	62.5%	60.4%	96.7%
9	38人	33人	79.2%	68.8%	86.8%
10	35人	26人	72.9%	54.2%	74.3%
11	36人	33人	75.0%	68.8%	91.7%
12	29人	23人	60.4%	47.9%	79.3%
13	37人	21人	77.1%	43.8%	56.8%
14	27人	22人	56.3%	45.8%	81.5%
15	32人	3人	66.7%	6.3%	9.4%
計	541人	436人	75.1%	60.6%	80.6%
平均	36.1人	29.1人			

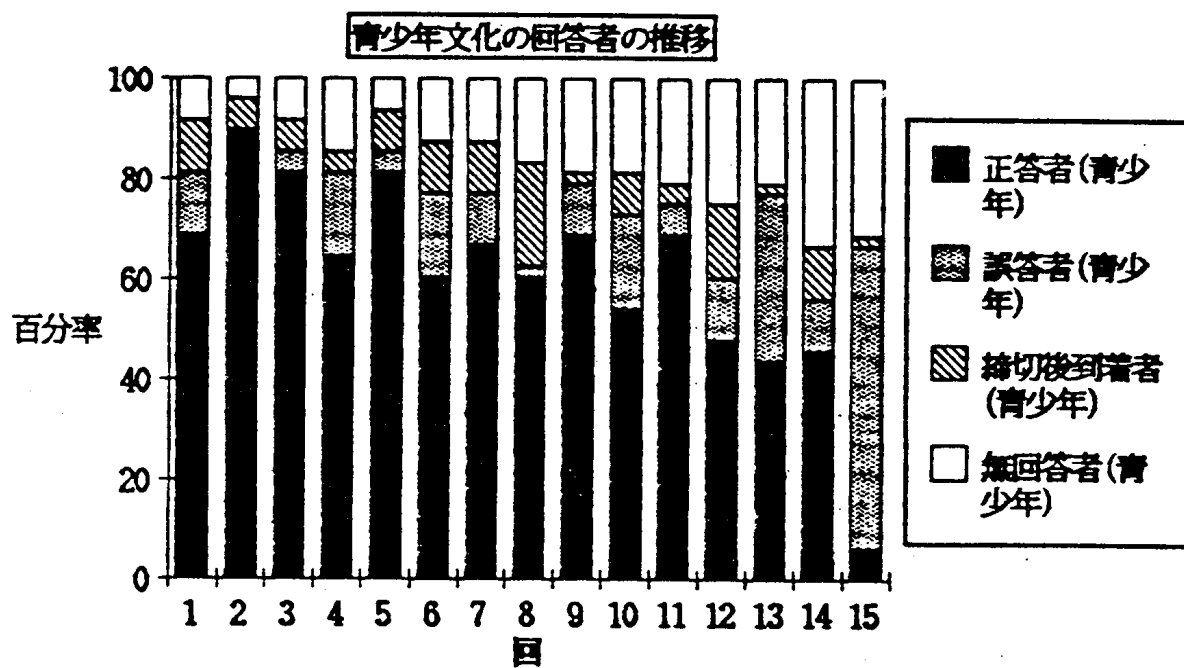
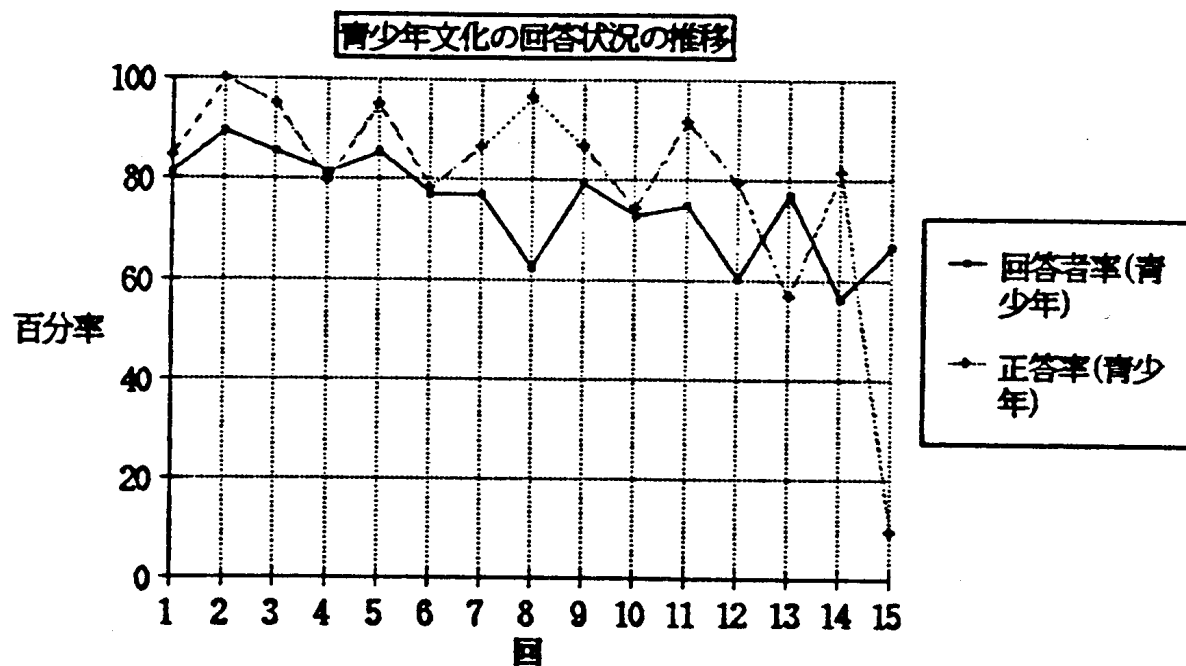
『青少年文化』の15回までの各回の回答者数、正答者数、回答者率最後が正答率でございますが、平均致しますと、回答者率が75.1%そして正答率も80.6%ということになっております。

これを次にグラフにしてご覧にいたしたいと思います。これが先ほどの数字をグラフにしたものでございますが、この実線が回答者率でございまして、点線が正答率になっております。(図 I - 1)

それから、これが棒グラフにしたものでございまして、一番上の台の所が回答が無かった所でございまして、締め切り後に到着した分も含めてみますと、80%の線がこの線でございますから、平均しますと大体80%ぐらい返ってきているという事でございます。

最初われわれはこんなにいい結果が出るとは思いませんでした、私もNHKに

図 I - 1



長くおりまして、講座番組なんか担当致しましたが、その経験から申しますと、3回か4回目ぐらいには半分ぐらいに減ってしまうという状況でございまして最後までついてきて下さるのが1割あればいいと思っておりました。

しかし、今回15回のquestionnaireを送ってやってみますと、このようなどとても高い回収率、回答率が出てまいって、実は驚いておるわけでございます。(表I-12)

表I-12 青少年文化の全体結果

受講生 番号	氏 名	回答数 (回)	正答数 (回)	正答率 (%)	回 答 状 況 123456789012345
4134	■ ■ ■ ■ ■	12	7	58.3	222221001212101
4137	■ ■ ■ ■ ■	9	8	88.9	222221220200000
4139	■ ■ ■ ■ ■	15	8	53.3	221222122121111
4140	■ ■ ■ ■ ■	10	10	100.0	222222202020200
4141	■ ■ ■ ■ ■	15	11	73.3	222212222221121
4142	■ ■ ■ ■ ■	15	12	80.0	222222222122211
4146	■ ■ ■ ■ ■	13	10	76.9	222222210222101
4147	■ ■ ■ ■ ■	13	11	84.6	222222221202201
4148	■ ■ ■ ■ ■	14	11	78.6	122222202122221
4149	■ ■ ■ ■ ■	12	8	66.7	220222122120101
4150	■ ■ ■ ■ ■	15	11	73.3	222221222122121
4151	■ ■ ■ ■ ■	9	7	77.8	022222002000211
4154	■ ■ ■ ■ ■	14	12	85.7	222122222220221
4155	■ ■ ■ ■ ■	2	2	100.0	000020000000020
4156	■ ■ ■ ■ ■	7	7	100.0	022022000202020
4157	■ ■ ■ ■ ■	11	5	45.5	222101122110100
4158	■ ■ ■ ■ ■	15	14	93.3	222222222222221
4159	■ ■ ■ ■ ■	4	4	100.0	000000022220000
4162	■ ■ ■ ■ ■	12	11	91.7	002222222220221
4163	■ ■ ■ ■ ■	10	8	80.0	121222222200000
4164	■ ■ ■ ■ ■	10	9	90.0	222120002222200
4165	■ ■ ■ ■ ■	12	10	83.3	222122202022102
4166	■ ■ ■ ■ ■	6	5	83.3	222120200000000
4168	■ ■ ■ ■ ■	13	9	69.2	222221022101221

4213	■ ■ ■ ■ ■	7	6	85.7	♥122000200220200
4214	■ ■ ■ ■ ■	15	13	86.7	222222222222121
4215	■ ■ ■ ■ ■	8	5	62.5	♥222000100021102
4216	■ ■ ■ ■ ■	11	8	72.7	022102222020121
4220	■ ■ ■ ■ ■	13	12	92.3	202222222222201
4221	■ ■ ■ ■ ■	15	12	80.0	222222222221112
4222	■ ■ ■ ■ ■	15	13	86.7	22222222222121
4223	■ ■ ■ ■ ■	2	2	100.0	♥000022000000000
4224	■ ■ ■ ■ ■	14	13	92.9	222202222222221
4225	■ ■ ■ ■ ■	5	3	60.0	♥122210000000000
4226	■ ■ ■ ■ ■	13	12	92.3	222222202022221
4227	■ ■ ■ ■ ■	5	4	80.0	♥022021200000000
4228	■ ■ ■ ■ ■	15	14	93.3	222222222222221
4308	■ ■ ■ ■ ■	15	14	93.3	222222222222221
4310	■ ■ ■ ■ ■	15	13	86.7	222222222221221
4312	■ ■ ■ ■ ■	15	13	86.7	222221222222221
4313	■ ■ ■ ■ ■	15	12	80.0	222222222122121
4422	■ ■ ■ ■ ■	9	8	88.9	♥222220002202100
4424	■ ■ ■ ■ ■	12	10	83.3	220221222222001
4426	■ ■ ■ ■ ■	9	6	66.7	♥120000122120220
4427	■ ■ ■ ■ ■	14	11	78.6	♥222122201222221
4428	■ ■ ■ ■ ■	12	10	83.3	222220221020221
4429	■ ■ ■ ■ ■	15	10	66.7	122122222222111
4431	■ ■ ■ ■ ■	4	2	50.0	♥020020001010000

平均の
 一 二 三
 回 答 数
 正 答 数
 正 答 率

= 11.3回
 = 9.1回
 = 80.6%

状況
 回答
 無誤
 正答

0
 1
 2

それから、これが全体の結果でございまして、こちらに各回の回答状況が出てまいりまして、誰が何回ぐらい回答をよこさなかったかというような事がすぐ分るものですから、お陰で問題のある方がすぐに発見出来まして、そういう方々には、フィードバックした材料と結果とは別に個々にお手紙を差し上げて回答を催促する事が出来ました。

表 I - 13 回答数別人数分布

青少年文化の全体結果
回答数別人数分布

区 分	(回)	人 数) 数	
		0	1	2	3	4	5	6	答 7	8	9	10	11	12	13		14
地 域	東 京	0	0	1	0	1	0	1	1	0	2	3	1	4	3	2	5
	千 葉	0	0	1	0	0	2	0	1	1	0	0	1	0	2	1	4
	埼 玉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	神 奈 川	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	2	0	1	1
性 別	男	0	0	2	0	1	1	0	0	0	1	1	0	3	1	2	11
	女	0	0	0	0	1	1	1	2	1	3	2	2	3	4	2	3
年 齢	-30歳	0	0	1	0	2	0	0	1	0	3	1	1	1	0	0	1
	31-40歳	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	1	4	2	3	3
	41-50歳	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	1	3	1	2
	51-60歳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3
	61- 歳	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
学 歴	大 卒	0	0	2	0	1	0	0	1	0	2	1	1	2	0	2	7
	短大 卒	0	0	0	0	0	1	1	1	0	2	0	0	2	2	0	5
	中高 卒	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	2	1	2	3	2	2
職 業	主 婦	0	0	0	0	0	0	1	1	1	2	1	1	3	2	0	2
	公 務 員	0	0	1	0	2	0	0	1	0	1	0	1	0	2	2	4
	会 社 員	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	2	0	3	1	2	3
	自 由 業	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
計		0	0	2	0	2	2	1	2	1	4	3	2	6	5	4	14

これは何回回答した人が何人であるかということがすぐわかる表でございます、ご覧になっておわかりのように、『青少年文化』について言いますと、1回も回答をよこさなかった人は48人中ゼロでございます、それから、1回しか出さなかったという人もゼロでございます。何と15回回答したという人が14人もいらっちゃって、一番多いわけでございます。この表で見えますと、8回以上出した人が圧倒的に多いわけですし、7回ぐらいしか出さなかった人というのはわずかとなっております。

それから、実は連休が何回かございまして、連休が回答率に影響するんじゃないかと思って調べてみました。(表I-14)

敬老の日がまず最初でございましたが、回答者率が81.3%で、あまり影響が無いようでございました。13日と15日で、ちょっと離れている事は離れておるんでございますが……。

それから、その次が秋分の日でございまして、これもちょっと離れている関係か、あまり回答者率に影響はございません。

その次、*印がついておりますが、体育の日の翌日に第8回目の放送がございまして、この時にガタッと落ちまして62.5%でございました。これはまた後ほどご説明致しますけれども、実は大変遅刻してきた回答が締め切り後に10通ばかり到着しまして、投函日等を調べました結果、これは連休のせいじゃなくて、郵便事情のせいのように思いました。

それから、文化の日でございますが、この日も平均の75%となっております、これもあまり影響が無かったように思います。

14回目でございますが、ちょうど勤労感謝の日の前日でございまして、しかも、14回といいますと、もう最後の方でみんな疲れてきた所で、これは56.3%、やむを得ないかと思っておりますが、それにしましても、ま

表 I - 14 連休前後の回答者率の減少状況

(1) 9/13 (木) 放送No.4. . . . 9/15 (土) 敬老の日

回答者数	39人
回答者率	81.3%

9/16 (日)

(2) 9/20 (木) 放送No.5. . . . 9/23 (日) 秋分の日

回答者数	41人
回答者率	85.4%

9/24 (月) フリカエ

* (3) 10/11 (木) 放送No.8. 10/10 (水) 体育の日

回答者数	30人
回答者率	62.5%

(4) 11/1 (木) 放送No.11. . 11/3 (土) 文化の日

回答者数	36人
回答者率	75%

11/4 (日)

* (5) 11/22 (木) 放送No.14. 11/23 (金)

勤労感謝の日

回答者数	27人
回答者率	56.3%

11/24 (土) トビ連休

11/25 (日)

たこの日も遅れて到着した回答が大分ございました。どうも郵便局の方がお休みするために、幕張地区の配達が遅れているというふうな事が影響したように思います。

それから、個人別の回答状況を見ておきますと、問題のあるモニターの発見がしやすいという事を先ほど申し上げましたが、催促の手紙を出した状況がこれでございます。（表Ⅰ－１５）

１５週の間には６回ばかり出しました。括弧で囲んであるのはトータルでございますが、こういう状況でございます。

ただ、この人数をご覧になっていきますと、手紙を出すのに寺脇が何か大変苦労したというふうにお考えかもしれませんが、全く苦労はございません。と申しますのは、４回欠とか３回欠、それから、しばしば遅れるという、問題のある９人の方が実は幾つかのパターンに分かれておりまして、全く回答をよこさない人、遅れる人、それもいつも遅れる人とか、或は放送前に投函している、これは放送を見ないでテキストを見て回答している人でございます。その人の中にいつもテキストだけで回答をよこす人と、たまに放送番組を見ないでよこす人がございまして、『MME研究ノート』にそのパターンが詳しく載せてございますが、５種類か６種類ぐらいの催促の手紙をワープロでたたいて用意しておきまして、問題発見次第出すということをいたしました。したがって、そんなに手間はかかりませんでした。

以上、簡単ではございますが、そういった事が『青少年文化』の結果でございます。

では、引き続きまして『人間の生物学』の方を若松先生からお願い致します。

表 I - 15 催促の手紙を出した状況

『青少年文化』

- (1) 昭和59年9月17日(郵送) 9名
 4155 4回欠
 4159 "
 4431 3回欠
 4162 しばしば遅れる
 4223 "
 4151 いつも放送前に投函する
 4158 "
 4134 たまに放送前に投函する
 4164 "
- (2) 59. 9. 26. 4名
 4426, 4224, 4215, 4216
- (3) 59. 10. 3. 1名
 4167, 4422
- (4) 59. 10. 11. 2名
 4167, 4422
- (5) 59. 10. 15. 6名
 4148, 4154, 4223, 4422,
 4427, 4431
- (6) 59. 11. 14. 9名
 4147, 4149, 4151, 4163,
 4216, 4223, 4428, 4431

＊ 『人間の生物学』について

○若松（放送教育開発センター教授）

『人間の生物学』はモニター数が55人ございまして、その回答状況は表のようになっております。（表Ⅰ－16）

表Ⅰ－16

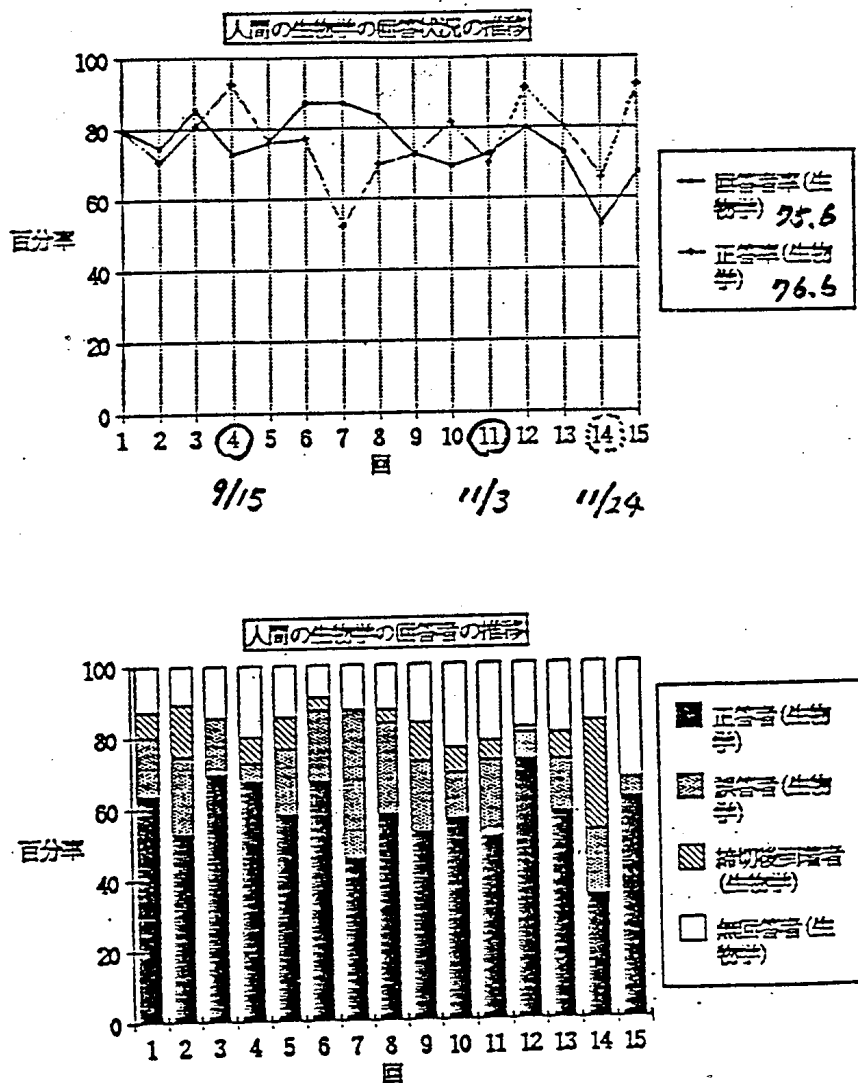
人間の生物学の全体結果
1人当りの平均回答状況

区 分		モ ニ タ 一 数 (人)	平 均 回 答 数 (回) a	平 均 正 答 数 (回) b	平 均 正 答 率 (%) b/a	回 答 数 の 不 偏 分 散 Va	正 答 数 の 不 偏 分 散 Vb
地 域	東 京	29	11.5	8.8	76.3	15.47	16.17
	千 葉	15	10.9	8.5	77.9	19.41	19.70
	埼 玉	7	11.1	8.4	75.6	20.48	25.29
	神 奈 川	4	12.3	9.3	75.5	6.25	11.58
性 別	男	31	11.7	8.4	71.4	14.53	17.18
	女	24	10.8	9.1	83.8	17.71	17.21
年 齢	-30歳	11	10.8	8.4	77.3	25.56	32.65
	31-40歳	18	10.6	8.3	78.0	13.66	11.98
	41-50歳	11	11.5	9.1	78.7	22.67	18.29
	51-60歳	11	12.5	9.4	75.2	6.47	12.05
	61- 歳	4	12.5	8.5	68.0	14.33	24.33
学 歴	大 卒	28	11.4	8.6	75.6	17.81	19.50
	短大 卒	5	11.6	9.2	79.3	16.80	21.70
	中高 卒	22	11.2	8.6	77.2	14.54	14.43
職 業	主婦	19	11.7	9.6	82.4	14.45	15.25
	公務員	14	9.7	7.4	75.7	21.14	17.17
	会社員	17	11.9	7.9	66.5	14.31	18.18
	自由業	5	12.6	11.4	90.5	9.30	10.30
計		55	11.3	8.7	76.6	15.82	17.00

これでおわかりになりますように、回答数は15回のうち11.3回というのが平均でございます。それから、平均の正答数が8.7というようになっております。

次に回答者率、正答率の推移でございますが、図I-2をご覧くださいますと1回から15回までの回答者率が実線、それから、正答率が点線になっております。

図I-2



この○印の所がちょうど休日にあたりまして、4回目の土曜日が9月15日の敬老の日、11回目が文化の日、それから、14回目の所が実は連休の谷間になっておりまして、11月23日の休日と25日の日曜の間にはさまれた土曜日でございます。これを見ますと、休日で少し低下している、特に、14回目の所で回答者率がかなり下がっていることがわかります。しかし、これは先ほど寺脇先生からご説明がありましたように、締め切後の到着者の数も含めて考えますと、回答をよこした人はほとんど落ち込んでいないことから、主に郵便事情によるものと私共は考えております。

このグラフは黒の所が正答者、斜線が締め切後の回答者、灰色が誤答者になっております。『人間の生物学』につきましては、15回全部にわたって回答をよこした人が13名でございます。ところで、遅れてきた人、まあ、遅れてきたと申しまして一兩日でございます、主として郵便事情などが相当影響しておるわけでございますから、それを回答に加えますと、15回全部回答した人が28名ということになります。50%以上の人が、15回全部の回答をよこしているというわけでございます。

それから、次に回答状況で特に2、3気がついた点を申し上げますが、先ほどの催促の手紙というのをこの『人間の生物学』の場合でも行いまして、第1回目は4回目の放送が終わった時点、第2回目は9回目の放送が終わった時点で、2回行いました。第1回目に8人の方に、第2回目には6人、計14人の方々に手紙を出しました。

一例を申し上げますと、1人の方で、しばしば放送の前に投函しているらしいことが消印から分りまして、放送を見てからアンケートの結果をくださいという事をお願いしたわけです。ところが2回ご連絡しても依然その傾向が直りませんので、困っておりました所、突然ハガキが参りまして、「実は

放送を楽しく拝見しております……」というのです。従って、放送を見ないで出しているという事ではないのですね。「問題を見ただけで答がすぐ分ってしまいますので、早目にハガキを出してしまいました。担当の方々ごめんなさい。」と、こういうハガキをいただきました。（笑声）

最終的には、55人の中で6人の受講生の方が、どうも途中でドロップアウトしたようでございます。ただ、この6人の方が全員将来とも継続をしないということではなく、恐らくこの半数ぐらいは、もう一度何かエンカレッジを致しますと、継続した学習を続けるんじゃないかと、私どもは考えております。

（2） 最終試験の結果

○寺脇

それでは、また急ぎまして、ついこの間データが出てきたばかりでございますが、最終試験の結果をご覧にいれたいと思います。時間がございませんので、細かいデータは省かせていただきまして、もしご質問がございましたらお見せ致しますが、一般モニターと特別モニターとの比較だけちょっとご覧いただきたいと思います。

〔O. H. P映写〕

表Ⅰ－17が最終試験の集計結果でございまして、『青少年文化』の方からご説明致しますと、全体のモニターの数が139名でございまして、一般

表 I - 17 最終試験の集計結果

		モニター 数 (人)	回答 者数 (人)	回答 者率 (%)	平均 正答数 (問)
青少年文化	全体	139	75	54.0	4.0
	一般 モニター	91	37	40.7	4.1
	特別 モニター	48	38	79.2	3.9
人間の生物学	全体	160	100	62.5	3.6
	一般 モニター	105	59	56.2	3.6
	特別 モニター	55	41	74.5	3.6

モニターがそのうち91名。この91名の方はテキストをもらって勉強するんだとおっしゃった方でございまして、われわれの方から一度も刺激がいていないわけでございます。下の方の特別モニターの48名、この方々に15回にわたって問題を送ったわけでございます。そうしてみますというと、一般モニターの方が回答率が40.7%、特別モニターの方が79.2%という事で、約2倍の方々が回答してきている。正答数は一般の方が平均4.1問、特別モニターの方が平均3.9問。大体似ておりますけれども、恐らく、回答者率が低くて正答数が多いということは、自信のある方だけが返事をしてくれたというふうに考えていいんじゃないかと思っております。

『人間の生物学』の方は回答者率が一般モニターが56.2%、特別モニターが74.5%でございまして、やはり特別モニターの方が高くなっております。平均正答数はどちらも3.6問ずつという事で同じでございます。

こういう結果から考えますのに、やはり特別モニターの方に4問出来る人がたくさんになった——最初のスタートの時点では、あの139人の中から48人を無作為に選んでお願いしただけでございまして、それが15回放送が済んだ時点で、特別モニターのグループの方に4問できた人がたくさんになっておるといふような事がいえるんじゃないかと思っております。

以上でございます。

○司会

ありがとうございました。これで大体前半部を終わりました、後半の方の登壇者席にちょっと変更を加えますので、ここで数分間お休みをいただきたいと思います。

午前11時53分休憩

午前11時58分再開

〔Ⅱ〕全体討議『放送利用の遠隔教育と今後の課題』

○司会

お待たせ致しました。後半の方は、新たに放送大学の矢部教授——矢部教授は東京第一学習センターの方の所長も将来兼ねられる予定でございます。それからもうひとつ、テレビ朝日映像のチーフ・プロデューサーをしておられる、先ほどの『青少年文化』をご担当の大谷プロデューサー、お2人に加わっていただきましてさらにいろんな角度からいままでの問題を検討していきたいと思いますが、一番最初に寺脇先生からご発言をお願い致したいと思います。

○寺脇

先ほどしゃべり過ぎて、多少疲れていますので、それでは簡単に、提言と申しますよりも、3ヶ月間50人の特別モニターと付き合いました結果の感想ということでお聞きいただいて、今後の討議のたたき台にしていただければ結構だと思います。お手もとの資料をご覧いただきたいんですが、プロットの「全体討議」のところに発議として、『放送利用の遠隔教育と今後の課題』というふうにしてありまして、そこに三つばかり項目を上げておきました。これを簡単にご説明いたします。

1. 『継続は力なり』……学生の面倒は誰がみるのか？

第一に、『継続は力なり』ということを申し上げたいんですが、私のおり

ました放送協会ではこの50年の放送教育研究の結果として、継続利用ということが非常に重要だということをずっと申し上げてきたわけであります。少しずつの効果が長い間に累積して大きな効果を果たすという意味なんでございしますが、今度のこのアンケート調査並びに調査の結果をみまして、継続学習、継続率が非常に高いということが分ったわけであります。また一方、正答率も非常に高いということも分ってまいりまして、やはり継続学習の結果こういうことになったんだらうと……。

しかし、継続学習と申しまして、放っておいたんではこういう継続率は出てこないだろうと確信しております。したがいまして、放送利用、あるいは印刷物で教育をする、こういうマスコミを利用して行う教育の場合には、やはり誰かがその学習者の面倒を——直接科目の内容の指導ということを離れても、いわゆる激励が必要なんじゃないかということを痛切に感じたわけでございます。

そこで、放送大学も来年（昭和60年）の4月から始まりますけれども、一体誰がそういうことをしてあげたらよいのか。さしずめ、学習センターあたりで面倒をみてあげていただきたいという希望を私は持っております。それがまず第一点でございます。

2. 『パーソナル・コミュニケーションの改善・充実』

——ニューメディアの利用——

第二の点でございますが、『パーソナル・コミュニケーションの改善・充実』と書きましたのは、今回のこの15回にわたるアンケート調査は大変作業が輻湊しておりまして、簡単だと先ほどちょっと申したけれども、正直言

って、私以外の協力者の先生方は大変だっただろうと思うんでございます。しかし、それでも相当な省力化を図りました。それができたということは、やっぱりコンピューターを使ったからだと思っております。コンピューターでああして個人別の回答状況等も即座に我々は掌握できるわけで、学習状況等がすぐわかって、いわゆるパーソナル・コミュニケーションができる状態がすぐ出てくるわけでございます。

そういう意味で、放送利用、マスコミ利用の遠隔教育にはコンピューターは絶対欠かすことの出来ないものだとすることを痛切に感じたわけでございます。

それにしましても、今度の試みは、問題の送付や回答集め、それに個別回答集計結果のフィードバック等、すべて最初はミニファックスを使いたかったんですが、まだネットワークができておらないものですから従来通り郵送法にいたしました。ところが、はなはだ幕張地区は郵便事情が悪うございまして、速達もきかない、1日1回しか集配達しないという地区でございまして、これがやっぱり、せっかくモニターの人達が間に合うように出してくれておるにもかかわらず、私どもの手もとに回答がつかなかったという結果になったと思っております。

そういう意味で、幕張地区の郵便事情の改善もさることながら、大学と学生間で使用するメディア自体を改善していかなければいけないのではないか。そのためには、将来ミニファックスとか留守番電話、電子郵便、あるいはキャプテン・システム、パソコンなど、いわゆるニューメディアを使わないとうまくいかないだろうということを感じております。

3. 『家族ぐるみの学習の可能性』

第三点は『家族ぐるみの学習の可能性』ということでございますが、『MME研究ノート』（9号）の132ページにありますように、4155番の方から、主人が忙しくなってしまうと回答ができない、本人にかわりまして私が回答いたします、回答をださないで本当にごめんなさい、というふうな手紙をいただきましたが、このことから気がつきますように、放送利用の学習、つまり家庭学習というものは家庭の中で学習が成立するわけですから、家族ぐるみで学習できるということ、やっぱり家族の激励というようなものは、相当大事にした方がいいんじゃないか。そういう意味では全日制の通学生の学習環境とは全く違ったよさもまた逆にあるわけでございます、そういうものも生かさないといけないんじゃないかということを痛切に感じました。

最後に、先ほど来、今度の調査にはコンピューターを使ったと申しておりますが、私は全くコンピューターはわからないんでございますけれども、柴山助教授のような非常にコンピューターに強い教官が私にぴったりとくっついてくれたものですから、実は私も、それじゃやろうかということでやったわけでございます。コンピューターというのはマス・コミュニケーションをパーソナル・コミュニケーションに換える機械でございますが、教育には絶対にパーソナル・コミュニケーションが必要でございますから、今後の放送利用の遠隔教育にはコンピューターは欠かせないということを最後に申しまして、感想と致します。

○司会

どうもありがとうございました。フロアの方からいろいろご意見その他をお伺いしたいと思います。その前にお2人の方にちょっとご発言をいただきたいと思います。まず最初に、先ほど来話題に上っております、『青少年

文化』の方のプロデューサーをご担当いただきました、テレビ朝日映像の大谷さんに、いままでのところを踏まえて、それからまた、フロアからいろんなご質問が今後出てくると思いますが、その橋渡しの意味で何か一つご発言を願いたいと思います。

○大谷（テレビ朝日映像株式会社第2制作局プロデューサー）

話を始めるきっかけが大変難しいんですけども、きょう私が参加させていただきましたのは制作者側の代表という形だと思うんで、そういった観点で……。

大学講座の制作が一般番組と一番違いますのは、普通ですとディレクターか、制作者サイドが主導権を握ることが多いんですけども、この大学番組に関してはそういうことが全く不可能であるということ。その辺から、端的にいいますと、全く作りにくい番組ということになってしまうわけですね。当然、私たちはプロダクションですから、放送大学の制作、それから、開発センターの制作部のディレクターの方たちとは考え方が違うとは思いますが、また、条件も違うと思いますが、一般通常番組の制作と作り方が違うということですね。そのために、先ほど太田先生がおっしゃったように、共同作業というのが大変大事な要素になるんじゃないかと思うんです。それと、事前に相当調査をしておかないといけない。お互いにコミュニケーションをつくっておかなければいけないということが言えると思います。

僕らは、最初に先生方とお会いするときに、お見合いと称しているんですけども、人種が——人種といったら大変失礼なんです——（笑声）違う感じの方たちとお会いするわけなんですね。それで、少なくとも数ヶ月間は同棲生活を送らなきゃならない。そうしますと、最初にお見合いのときに、この先生はいやだとか、このディレクターはいやだといって別れてしまうん

ならばお見合いになるんですけれども、そのお見合いが永続しちゃうわけですね、何ヶ月間かは……。そうしますと、いやいやながらも仕事を一緒にしていかなければならない。そのためには、やはりお互いに譲歩していかないといけない。そこに難しさが一つあると思います。

番組を作っておりまして最後の12、3回目になりますと、お互いの気心がわかってやっとよくなったなと思うころに終わってしまうというご意見をよく伺います。そういうことでもってこういう意見になると思うんですけれども、講師団と制作者集団というのが、水と油とまではいかないんですが、溶けにくい部分が相当あるように思いました。そのへんをうまく溶け合わせていかないといい講座はできないんじゃないだろうかというのが、今まで6年間ばかり担当してきました僕なりの一番大きな反省でもありますし、考え方でもあると思うんですね。

○司会

どうもありがとうございました。またいろいろ、フロアからのご質問に対してお答え願えたらと思いますが。それでは次に、矢部先生いかがでございましょうか。寺脇先生のああいう具体的なお提案を踏まえまして、将来の東京の第一学習センターといたしましてはというところを……。

○矢部（放送大学教授）

将来ではなくて、本年（昭和59年）4月から私は第一学習センターの所長というお話をいただいております……。

お手もとにも資料が行っておりますけれども、11月の1日から学修案内、学生募集要領というのが出まして、これを取りに来る人たちに電話あるいは現場で面接をして指導するということを通じまして、いろいろ学習の指導方法について考えております。8万部刷った学生募集要領がもう全部出ち

やって、いま刷り増しの2万部がということで、果たしてこれが、この12月1日から始まりました願書受付けでどんな状況になるだろうか。わっと殺到して処理ができなくなるのか、あるいは閑古鳥が鳴くのか……。

これはこの20日ごろに中間発表をということで、発表の方法は香月学長の胸三寸にお任せしてありますけれども、多分明日ここに来られて香月学長の若干のお話があると思います。われわれはいま箝口令をしかけているんですが……。

ただ、大体の感じでいえることは、もうすでに予定した今年度の1万人、そのうち全科履修生が4千人、それから、科目、選科、特修生が6千人ということで、トータルの数で埋まっている。あと、学習センターごと、それから、専攻ごとの凸凹があると思いますので、そこらのところをならしてどうということになっていくかということがあるかと思いますが、とにかくそういう状況で大ざっぱな言い方を致しますと、6学習センターで平均2千人ぐらいの学生さんをお引受けしなきゃならないだろう……。

それで、話が長くなりますといけませんので、簡単に申しますと、先ほどまでのいろんなご発表を伺いまして、この発議にしたがってまいりますと、『継続は力なり』ということについて……。おそらく、面接授業にやってきます人は各学習センター5百人でしょうか、千人でしょうか、そういう間の数の人達は先ほどお話がありました中の特別モニターに該当するでありましょうし、隔週5回の面接授業をする間にそういう人達を励ましたり、あるいはそういう人はもうわかっていますから、欠席するようだったら電話で呼びかけるとかいうことは若干はできると思います。しかし、あとの残りの、面接授業の機会が無い人達——おそらく、面接授業に出ても、それ以外の科目については1人あたり1科目ないし2科目しか面接授業を与える機会は持て

ないと思いますので——そういう人達がどのぐらいドロップアウトするであろうかということについては、いま一番頭の痛いところでございます。

しかし、面接授業を受ける受けないにかかわらずともかく学習センターに出てきて、そこへ教員が——私を筆頭といたしまして5人くらい手わけをして、授業の時間帯の前の時間、間の時間というところで学習指導の面接に応ずることになっておりますし、後は、質問紙を入れて、これは本部で集計をして、非常に関心の高い質問なんかについてはテレビを通じてそれにこたえるということで、なるべくコンタクトをとろうと考えております。

それから、『パーソナル・コミュニケーションの改善・充実』ということでは、学習センターというのが唯一の機関になりまして、そこに図書室があり、ビデオの再視聴室がある。それから、ご婦人の方々はママさんバレーをやらせてくれとか……。ですから、ゆくゆくは体育館だとか体育設備をつかって、体育の実技なんかも兼ねて、それから、サークル活動なんかもしてもらおうと考えておりますが、ともかくさしあたりは、いかに学習指導の効果を上げるかということで精一杯でございます。

それから、先ほどお話が出ました『家族ぐるみの学習の可能性』でございますが、願書を取りに来られた方といろいろ話をしていますと、「おじいちゃんとわれわれ夫婦と子供と3代にわたって放送大学に入学をしたい。それで、いま遠いので、第一学習センターは世田谷だけれども、ちょうどいい家があったので、必ず入学できるというならそこへ引っ越したいが……。」

「それはちょっとまってください。」（笑声）などという話しもございました。そういうこともございますし、それから、中年のご婦人で、「私は数学には弱いのですけれども、主人が強いので、ふだんいろいろ教えてもらうことができるんです。また、息子は外国語系の大学に行っているから、それも

息子から習える。」と。大変結構です。ふだんそういうふうにして学習をしてください。ただ、試験はあなたご自身が受けられるんですから、（笑声）がんばってくださいというようなやりとりもございます。それから、願書を取りに来る方も、おふくろに頼まれましてとか、家内に、主人に頼まれましてというように、かなり家族の連携的な協力が多いようでございます。

それから、総体的な感じでは、最初は、これは生涯教育ですから、かなり高齢の方で — これは男性の方が多かったんですが、願書を取りにこられた方もちらほらありますけれども、しかし、実際いまのところの推移を聞いてみますと、やっぱり50歳以上というのは非常に率が低いようでございます。最高齢は、68歳とか70歳という方も若干はおられるようですけれども、主流になるのは20代後半から30代、40代の前半で、そういう方々が非常に着実な考えでもって勉強したいという意欲を持っていらっしゃるんで、学習指導の面でぜひわれわれもがんばらなきゃいけないと思っております。とりあえずそれだけ一言……。

○司会

どうもありがとうございました。大変お待たせいたしましたけれども、残り12、3分でございますが、これを、フロアの方々のご意見の発表とか、ないしはご質問とか、そういうものにあてたいと思います。いかがでしょうか。どういうご意見でも結構でございますから、どうぞお出してください。

○辻（放送大学教授）

私、放送大学の辻でございます。第2セッションの司会を引受けさせていただきます。

寺脇先生に質問させていただきますが、『継続は力なり』というご結論でございますけれども、そのご結論を出すためのご研究の経過の最後のところ

が私よくわからなかったので、継続は力でないという結論にもなっているんじゃないかというふうに疑われましたので、それをちょっとご説明いただきたいと存じます。

もう一つ、ついでにさせていただきますけれども、私には子供が2人おりまして、1人は女の子、1人は男の子でございますが、これに両親がおしゃべりという刺激を四六時中与えて参りました。太田先生のテーマを拝見いたしましたしてちょっとと思いますが、その結果、1人は大変なおしゃべりに成長いたしましたし、1人は全然ものを言わなくなってしまいまして、(笑声) おしゃべりという刺激継続は一体何になったのか、私わからないのでございます。それで、継続という刺激が力になるという根拠をご研究の中にお出しになったところと、継続が実際にどういう環境とどういう状況に応じて力として変化するのか、そこの点をちょっと承らせていただければ幸いですと存じます。

○寺脇

『継続は力なり』と申しましたのは、先ほど数字でご覧に入れたように、特別モニターの方は、「特別」とはついておりますけれども、決して特に選んだ方ではございませんで、各実験番組には200人ずつの受講生を募集して決めておるわけでございますが、その中からサンプルをとりますときに、過去の受講生の属性等を勘案しまして、そのバランスで70人お願いして、例えば『青少年文化』について申しますと、48人が参加しようというふうに言われたわけです。

そうしますと、全く問題を送らないで、言葉は悪いが、野放しになっている一般の受講生の方のグループが片っ方にありまして、片っ方に回答を出そうが出すまいが1週間に1回ずつ15回、とにかく毎週必ず問題がいくグ

グループが48人いるわけでございます。それで、8月の23日にスタートしたわけですが、先ほどの刺激——おしゃべりの刺激じゃなくて学習を促進する刺激でございますが——そういうものをとにかく15回ずっと片っ方のグループには与えていった。

そうしますと同じような属性のバランスで集めてある二つのグループのうち、片方は、最終の試験を致しましたら、4問あった人の数が非常に多いわけなんですね。正答率が非常に高い。そのことをもってそれは結局、継続して学習していらっしゃった結果そうなったんであろうと申し上げたわけでございます。刺激にしても別におしゃべりを奨励したんではございません。そういう刺激を15回与えた結果が先ほど発表した結果だと、こういうふうにご理解いただきたいと思います。

○司会

『継続は力なり』というのはなかなか抽象度の高いスローガンでございます。辻先生はまだちょっと納得いかないという表情をされておりますが…。

○辻

一つは、放送大学そのものは、ある意味では受験というものを廃止するというような思想が片方にございます。そして、この中では、勉強せい、勉強せいといわれ学習塾に行かされる刺激、そしてその刺激は勉強せい勉強せいという刺激だけでなく、学習そのものの刺激も非常にたくさんある中で、これについてこれなかった学生達、あるいは人生に触れたときに初めて自分としての枠組を持つようになった人達、こういう人達に対してわれわれは、——これは刺激というんではないと思いますけれども——一つの勉強の形を提供しようとしているわけございまして、私が、ちょっと持ちました

疑問は、刺激ということに総括される学習の刺激は、それ自身に非常に危険な要素とわれわれが思っているものも含まれるであろうということでございます。

○司会

やっぱり学習は、刺激が来たときにそれを受け止める学習の主体の側にそれに対する反応の仕方みたいなものがあって、いまの日本の社会の中では、確かにいま辻先生がおっしゃったような受験とか学歴指向とか、そういう一つの精神的な態度がある中で、ある刺激が来るわけですが、その刺激をやはり生涯教育という立場から放送大学の学生には受け止めて欲しいわけです。

だから、そういう問題——他の先生方もこの点についてご意見ございましたらどうぞ。深谷先生いかがですか。そういうような学習の刺激を放送大学はいろいろやるんだけど、それをうけとめる学習者、主体にとってはそれは一体どういう意味をもっていると思って放送大学は刺激を与えているのか。毎週、15回にわたって45分ずつということの意味ですね。日本の社会に一つのインパクトが電波を通じて流れていくわけですが……。

○深谷

直接答になりませんが、今度の場合はまだ、私どもからいうとブラック・ボックスなんですね。勉強していただいている方がどんな人かは分らずに今度がつくってしまったわけですが、これがある程度、ご覧いただく層が寺脇先生のご研究で大分はっきりしてくると、その場合には、こういうふうな教材をこういうふうにお出しした方がわかりやすいんじゃないかと、答が入ってくるんじゃないかと思うんです。

ただ、今度聞かせていただいて、こういうふうに、刺激とっていいかも知れませんが、とにかくいろんな形で条件に恵まれると8割の方が残って下

さることがわかったということは、われわれからいって非常にありがたいことだったんですね。僕は、おしまいの方は誰も見なくなっちゃった、運が悪くと最後はもう1、2割になるという最悪の事態を予想してまな板の上に乗りましたが、寺脇先生のご努力の結果、8割の方が最後までついてきてくださった。これは放送大学としては一番条件に恵まれた場合の数値として、非常に大事に考えていくべきものだと思います。

○司会

本当にそう思いますね。私もそのとおりに受け止めています。この問題はまだ残ると思いますが……。

○寺脇

ちょっと一言……。放送大学は、1週間に1回ないし2回ずつ定期的に教材が送られてくる、放送が学習のペースをつくってくる、その効果も無視できないということはもう前からいわれておることでございまして、おそらく放送大学の学生というのは、いわゆる印刷教材だけでやっております通信制の学生とは、そういう点でも学習環境は全く違うだろうと思いますね。

○司会

そういうペースメーカーの役割というのは、従来から確かに……。この問題は今回はこれで打切らせていただきまして、勿論、後の方にいろいろお出しいただくことは構いませんし、また、お昼休みにでもと思います。まだご質問はいろいろたくさんおありだと思います。北村先生どうぞ。

○北村（北海道大学教授）

先ほどの毎回お出しになる質問でございますが、それは1回1問ずつでございますね。それから、最終のテストは5問でございますね。多分こういうことをお考えになったと思うんですが、いまのところは実験放送で強制力が

ないもので、お客さんでございますので、あまりたくさんの質問をすると逃げられてしまうということもあって1問になったんだろーと思いますけれども、本当は理解力を見るときとなれば、やはり客観テストである以上、もっと多くの質問でなければならないだろう。それから、最終試験になりますと、客観テストでいいますと50問ぐらいなければ細かい理解力は見られないであろう。何を理解したかということを見るためには、その一つの項目について、やさしいのから難しいのまで2、3問を出して、その中での総合評価と、1問について見るというようなことを多分お考えだろうと思いますが、放送教育が始まりましたときには、そういうふうなことをやはりお考えでいらっしゃいましょうか。

○矢部

ご指摘のとおりでございまして、どういう試験の形をとるかということ、数が多いいところはとても採点ができないだろうから択一式ということに限定されておまして、20問の択一を1時間でやる。初めは1時間じゃ試験は駄目だから2時間ということをお願いしたんですが、スペースの関係でどうしても1時間にということで、ついにわれわれ教授陣は涙をのんで1時間に縮めたわけでございます。それから、中には、どんな困難を冒しても択一式では駄目だ、いわゆる論文式の、記述式の試験をしたい、あるいはその両方をあわせてやるという先生方もございまして、実はこれがどういう形で来年の7月下旬の試験の時にできますか。それから、その前、8回まで終わったところの通信指導もやはり択一式と記述式をやっていくことになると思います。

その事実はどうでございますけれども、先ほどの辻先生のお話しとも関連いたしますが、要するに放送大学というのはみんなが励まして、刺激を受け

て聞いてくれて、試験を受けてくれればいいものか、そのときに授けたい知識のレベルは一体どこに期待するんだ……。要するに放送大学自身は正規の大学であるということで、いままでの大学の設置基準に沿ってやるとして、授ける内容はどういうレベルを保たなきゃならないか。しかし、同時に、いままでの大学というものが全ていいわけではないし、その欠陥を補うようなところを、どう伸ばしていったらいいのか。

しかしまた一方では生涯教育という役割もある。その間のジレンマで辻教授なんかいつも教授会でそういうことをいい出されまして、われわれも議論に巻き込まれているんですが、残念ながら、いまのところまだ結論は出てないままであります。

ですから、そういう意味で、今日も数は少ないけれども、4問の正答があったということは、極端に言えばあまり意味がない。問題のレベルがどうあるか、それからどういう期待をされているかということとの関連で……。そこらが実は、この放送大学というか、大学教育という形でわれわれがやる仕事のポイントじゃないかと思っております。

○司会

どうもありがとうございました。すでに定刻を過ぎておりますけれども、しかし、どうしてもこの際質問をしたいという方のために1問だけと思いますが、いかがでございましょうか。

○天城（放送教育開発センター所長）

いまの全体の説明は、寺脇さんが初め調査の仕方ですべての時間をとっちゃいまして、肝心のところが幾つか抜けちゃっているんですが、1問だったから不十分だ、5問で正解がどうだということは、これはそんなに問題にしないでいただいても意味がないんです。この最大のねらいは、どうやって学習を

継続させるか……。それはインセンティブという言葉になるかも知れません。あるいはモチベーションかも知れませんが、いろんな方法が考えられるが、いま考えられる方法は、毎週葉書を出すという一つのインセンティブをやってみた。そうすると継続した。継続の結果力が出たという、むしろ、どうやったら継続させられるかということの方に重点を置いて見ていただかないと、1問だったか、5問だったか、これはあまり問題にされても意味がない、そこのところだけ強調しておきたいと思います。

○司会

今の所長の言葉を、第2問といいましょうか、そちらの方の一つの結論にしたいと思います。時間の制約がございますので、第1セッションをこれで終わらせていただきたいと思います。